

# 第一次世界大戦前におけるアメリカの 農業と欧州市場の関係

牧 野 俊 重

## 1

周知の如く、アメリカは1914年に勃発した第一次世界大戦に際し、最初欧州諸国の需要に応ずることの出来る主要な中立国として経済的利益を得、次いで参戦国として連合国（協商国側）の勝利に大きく貢献すると共に、この大戦を契機として一大強国へと成長をみせ、独立以来アメリカの国際経済関係を特徴づけてきた債務国から世界第一の債権国へと変化を遂げたのであるが、反面農産物に対する異常な需要が農業構造を変化させたために、この大戦はそれまでに安定をみせつつあったアメリカの農業に由々しい攪乱的な影響を及ぼしたのであった。

本稿は最初「第一次世界大戦とアメリカの農業」というテーマで、その様なこの大戦がアメリカの農業に及ぼした影響とその結果について考察することを目的として着手したものであるが、そのためには大戦に先立つ時期におけるアメリカ農産物の欧州市場への輸出関係が如何なる経過を辿ってきたかが先ず把握され、それを踏まえた上で大戦の齎した影響とその結果に及ぶ必要があると思われるのである。然も、その際に19世紀から今世紀への転換期を境にその前後で著しい変化がみられるために、その相違を明らかにする必要から考察を19世紀後半に溯って開始させたいのである。しかし、紙数の都合上その全体を考察するには到底及び得ないので、大戦期についての考察は別稿に譲ることにし、今回はこの様な意図の下での前段階の作業として上記のテーマで大戦より以前の時期の経緯に限定して考察することにした。従って、本稿では先ず南北戦争以降における西欧

諸国へのアメリカ農産物の著しい輸出の拡大の様相とその理由を把握し、次いで略世紀の転換期を境に第一次大戦の勃発に至るまで食糧を中心としてそれが著しく減少するに至ったのは如何なる要因に基づいていたのか、またそれにも拘らずこの期が農民にとって一つの繁栄期とされているのは何故であったのかを明らかにするという順序で考察を進めることにしたい。

注 1) 1914年6月30日にアメリカは長・短期を併せた民間の資本勘定で正味37億ドルの債務を負っていたが、1919年には民間の対外投資が1914年6月30日の35億ドルから70億ドルに増加すると共に、外国所有のアメリカ有価証券の戦争に付随した本国還流のために政府貸付を除いた同じ資本勘定で逆に37億ドルの債権を有するに至っていたのである。U.S.Department of Commerce, Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970*, part 2 (Washington, D.C. : U.S.Government Printing Office, 1975), p.869, series U26-39.

## 2

アメリカの歴史を通じてその農業は自国の経済生活において重要であっただけでなく、西欧の経済生活においても重要な役割を演じ、産業革命の開始以降における西欧での工業化の進展と共に、そして可成りの程度それに依存して発達を遂げてきたのであった。然も、この様なアメリカ農業の発展の規模と性格の双方は欧州の工業国、殊にイギリスとドイツの成長によって齎された食糧と工業原料に対する需要によって大きく左右されてきたのである。<sup>1)</sup>

1861年から1865年に及んだ南北戦争は必然的にアメリカの貿易を抑制するものとして作用した。農産物に関する限り、南部の輸出品である綿花、タバコ、米の夥しい輸出の減少があったが、これに対して北部諸州は著しい輸出を維持することが出来たのであった。何故ならば、イギリスの穀物生産が1860年、1861年、1862年と不作であり、欧州大陸の小麦輸出

第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

国の供給がその不足分を補い得なかったからである。換言すれば、ロシアとプロシアからの輸入は安定したままであったが、この両国はイギリスからの需要の著しい増加には応ずることが出来ず、またフランスからの輸入は1861年と1862年の不作のために鋭い減少を余儀なくされており、エジプトと南アメリカ諸国も不足に対処するに十分な小麦を供給することが出来ず、アメリカだけがこの不足を補うことが出来たのであった。斯くて、これは南部連邦が期待したイギリス政府によるその承認を妨げ、戦時を通じてアメリカの財政的立場を支えるのに極めて大きな価値を持ったのである。南北戦争期におけるアメリカの農産物輸出の状況は表1に示されるが、肉と肉製品の輸出の増加が穀物のそれに劣らず顕著である。軍隊への動員による人的資源の損失の結果として予想された生産の減少は、一部は移民によって、と同時に馬力利用農機具の使用の増加によって著しく相殺されたのであり、これがアメリカの内外での高価格という刺激に対しての力強い反応を可能にしたのであった。因に、外国市場への大量の輸出を可能ならしめたものとして、南部諸州における北部の生産品に対する以前の大きな市場の閉鎖があったことも併せて指摘されなければならないであろう。<sup>2)</sup>

表1 南北戦争期におけるアメリカの農産物輸出の推移

年(その6月30日を以て終る)	小麦と玉蜀黍	牛肉と豚肉とそれ等の製品	綿 花	葉タバコ
	千ブッシェル	千ポンド	千ポンド	千ポンド
1860	21,462	161,211	1,767,686	173,844
1861	64,348	184,829	307,516	168,469
1862	81,619	395,585	5,065	116,723
1863	75,262	532,203	11,385	118,750
1864	46,615	362,461	11,994	113,384
1865	26,761	190,334	8,894	161,355

出所：注2)をみられたい。尚、小麦と玉蜀黍にはそれ等の粉も含まれている。

南北戦争後、特に 1870 年と 1900 年の間にアメリカの農産物はイギリス、ドイツ、フランス及びその他の欧州近隣諸国に大量に輸出されるに至り、西欧向け輸出は一つのクライマックスに達したのであった。<sup>3)</sup> 小麦、玉蜀黍を中心とする穀物、肉と肉製品、綿花、タバコが主要輸出品を構成していたが、戦後の北部と南部の回復は迅速且つ着実であり、殊に南部は米を除けば不利な立場に置かれていたにも拘らず、その輸出市場の回復と発達<sup>4)</sup>は極めて良好であり、その主産物である綿花とタバコに対しては著しい需要がみられ、また相対的に他の生産国との競合による影響も殆ど受けなかったのである。と同時に、北部の輸出高は驚異的な増加を示したのであった。この様な農産物輸出の著しい増加にはそれを促進せしめるいくつかの要因が存在したのであるが、ここでそれを指摘すれば事実上の自由地 (free lands) と移住者の殺到を擁した新しい西部での農業生産の拡大と低価格化、西欧での工業化の進展と都市人口の急速な増加、そして少なくともイギリスとドイツにおける工業化に伴っての農業の部分的な軽視、地域的に専門化された生産地と消費の中心地とを結ぶ安価な輸送手段の急速な発達等<sup>5)</sup>が挙げられるであろう。

この様な外国からの競争に直面して、確かに西欧の農民は溯れば少なくともフランスがその不足分を補うために極めて安い価格でウクライナから穀物を輸入した 1817 年以来不安を抱いてきたのであるが、19 世紀半ば以降の動向は一層懸念せしめるものであった。イギリスが 1846 年にその穀物法 (即ちその穀物への保護) を廃止し、フランスが再びロシアから低価格で小麦を輸入し、1860 年代の初めまでにはフランスを含む殆どの西欧諸国が一般的な欧州の動向として農産物に対するその関税を一層低い率に引下げたからである。斯くて、安価な労働力に依存したロシアの小麦や鉄道の発達と海上輸送手段の改善、農機具の利用に依存したアメリカの穀物が低コストで生産され、それは事実上西欧の小麦生産者を圧倒し得たのであった。しかし、これ等の懸念の現実化はロシア産穀物のバルト海、黒海の

第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係  
通過を阻んだクリミア戦争（1853年—1856年）、アメリカの南北戦争、フランスの生産を減少せしめた普仏戦争（1870年—1871年）、人口の増加に伴う相対的に高価格での国産の食糧に対する活発な需要、カリフォルニアとオーストラリアからの新しい金の供給に起因した物価水準の上昇傾向、工業の発展による相対的に高い購買力等によって実際には引延ばされ、事実19世紀の第三・四半期特に1853年から1873年までの期間は寧ろ西欧農民に繁栄を齎したのであった。<sup>6)</sup>

然るに、1873年以降外国からの競争の脅威が現実のものとして痛感されるに至ったのである。クリッパー船の成功と不定期貨物用汽船（鉄製）の出現が海上運賃率の引下げを齎し、例えば穀物の大西洋横断の輸送費は1ブッシェル当り1874年の20セントから1904年には2セントとなっている。また、アメリカ中西部の様な農業地域への鉄道の建設を伴った地価の低下は輸送を一層安価なものにし、穀物のシカゴからニューヨークへの輸送費を1870年と1881年の間に1ブッシェル当り33セントから14セントへと低下せしめ、小麦栽培の機械化と広大な草原地域での牛の放牧、加えて1880年代に可能となった冷凍・冷蔵の設備を備えた船舶や貨車での肉類の輸送は嘲笑的な低価格での欧州への輸出を可能にし、斯くてアメリカの農産物が大量に欧州市場に殺到し始めたためである。<sup>7)</sup>

更に、これに加えて西欧農民の状態を一層悪化させたものとして、物価水準が1873年以降下方へと逆戻りし始め、この低下傾向が1880年から1882年までの僅かな中断を除いて略1896年まで続いたことが指摘されなければならないであろう。所謂「物価の長期低落」期乃至は世界的な「大不況」期として把握される時期にあったのであり、この期間に一般物価水準は40%下落したが、農産物価格は国際的に一般物価乃至は工業製品価格より以上に下落し、また賃金や利潤が低く留め置くことを余儀なくされたために増加しつつある都市住民の購買力も低下したのであった。特に主要農産物の蒙った打撃は大きく、例えば小麦価格は1ブッシェル当り1871

年の1ドル50セントから1885年の86セントへと、そして1894年の或る一日に関しては23セントにまで下落し、また肉類の価格も1873年から1896年までに略25%の下落を余儀なくされ、この「物価の長期低落」は西欧農民は勿論、アメリカを含めた農産物輸出国の農民にも大きな痛手を与えたのであった。<sup>8)</sup>

ところで、このような状況下でイギリスの農業は如何なる変化を余儀なくされたのであろうか。19世紀の前半期には農業生産の増加は人口の増加と歩調を揃えており、過去40年間に4分の3以上の人口増加を経験して2000万人の人口を擁した1841年におけるイギリスの労働力は略1000万人であり、この約5分の1が農業従事者であったが、その必要とする食糧の殆どを自給出来たのであった。そして、続く1850年から1873年に至る期間はイギリス経済の比類のない発展期に当っており、イギリス農業も1850年から1875年まで「黄金時代」を享受したのである。<sup>9)</sup>しかし乍ら、1874年を最後の良き年としてイギリス農業は1875年には不況の影響を蒙り始めたのであった。そして1882年には政府の委員会も「農業界を襲ってきたその痛手の際立った範囲と強烈さ」を悲痛にも認めたのであるが、然も時と共に生起してきた状況は短期的であるどころか永続的なものであり、十分には回復させることが出来ないということが明白となり始めたのであった。にも拘らず「フランスがその農民を保護したのに対して、イギリスは全体としての社会に最大の利益を齎すと看做された自由貿易政策に頑なに固執した」<sup>10)</sup>のであり、この様に農業界に定着した不況は第一次大戦まで実際には殆ど救済策が試みられることなく継続したのである。この事実は何よりも1875年以降における耕地面積の著しい減少と家畜の飼育に利用される面積の著しい増加によって端的に示されるであろう（次の表2を参照されたい）。<sup>11)</sup>イギリスにおける小麦の作付面積は1870年の1,417,000ヘクタールから1900年には747,000ヘクタールへと（略47.3%）減少しており、その減少は主要穀物の中で小麦が最も著しかったが、同年で

第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

1,118,000ヘクタールから1,225,000ヘクタールへと増加をみせたオート麦を除くイギリスで栽培された穀物（ここでは小麦、大麦、ライ麦、混合穀類、豆、豌豆から成る）の作付面積をとれば、この30年間に1,002,000ヘクタール<sup>12)</sup>即ち殆ど36.5%減少したのである。また、それ以前の数字が利用出来ないために1884年と1900年をとれば、その間においてもイギリスの小麦と大麦を合せた生産高は56,046,000ヘクトリットルから41,802,000ヘクトリットルへと25.4%（これにオート麦を加算しても12.8%）減少<sup>13)</sup>しているのである。他方、牧草地の面積は1876年から1906年の間に殆ど3分の1増加したのであるが、国内で飼育された家畜から生産された肉類<sup>14)</sup>の量は僅か5%増加したに過ぎなかった。

表2 イングランド、ウェイルズ、スコットランドの  
エイカー数の変化

年	耕 地	永久草地
1871	18.4 百万	12.4 百万
1881	17.4	14.6
1891	16.4	16.4
1901	15.6	16.7
1911	14.6	17.4
1914	14.3	17.6

出所：注11)をみられたい。

斯くて、イギリスは極めて大量の輸入食糧に依存せざるを得なくなっていたが、イギリスの海外企業は外国からの食糧の先例のない輸入のための基盤を既に築いてきており、1870年代後半以降安価な食糧が関税障壁のないイギリス市場に大量に殺到し始めたのであった。アメリカが第一の供給国であり、1880年代にはそれにカナダ、アルゼンチン、オーストラリアが続いたのであった。また、1870年と1900年の間にイギリスの小麦と小麦粉の輸入高は230万トンから殆ど500万トンへと上昇し、生肉のそれ

は13万トンから略100万トンへ、バターのそれは6.5万トンから16.9万トンへと増加したが、これ等の増加はこの期間における42%の人口増加を遙かに凌ぐものであった。1870年には小麦の総供給の3分の2は国産であったが、1890年にはその割合は3分の1まで落ち、また1871年にはイギリスの食肉供給量の僅か15%に過ぎなかった肉類の輸入も1900年には50%を超えたのである。<sup>15)</sup>にも拘らず、イギリス農民は天候と収穫が余りにも不利でない限り不安定なその経済的地位を維持し続けたのであるが、1876年、1877年及び1879年は不作と家畜の大量損失の年であり、このような場合以前には価格が上昇し、また過去においては農業の一分野が失敗を余儀なくされた時には通常他の分野での増進が図られてきたのであった。しかし、今や「牛肉の値が下がると穀物が騰貴する(Down horn, up corn)」という古い諺は真実ではなくなり、この不満足な収穫と低価格の結合が1870年代以降何度も繰返されたのである。因に、1867年と1907年の間に全人口は1100万人の増加があったにも拘らず、農場労働者数は100万人から約60万人へと減少したのであった。<sup>16)</sup>

また、このような状態はイギリスに限られるものではなかった。ただ欧州大陸の主要な農業地域は辛うじて混乱がより少ない程度で止まったに過ぎなかったのである。そして、この点で特に注目されるのがデンマークであるが、それは同国が外国との競争に直面して徹底的且つ劇的な調整を成し得たからである。小麦価格が暴落し始めた農業不況の開始点で「穀物が値下がりすると牛肉が騰貴する」という諺に従い穀物栽培から家畜特に牛の飼育に変えたデンマーク農民は、続いて肉類の価格も下落し始めた時に家畜を屠殺場に送る代りに酪製品の生産を増加させたのであった。そして、彼等は1875年以降ミルクを処理しバターとチーズを生産するために協同組合的な酪農場を設立させるに至ったが、ルイ・パストゥールの1858年の乳酸発酵に関する論文に基づく低温殺菌法の実施、乳酸の付加によるバターの製造、特別培養の利用によるチーズの製造は、ドゥ・ラヴァル・ク



### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

リーム分離器の発明が1879年に酪農場の機械化を可能にしたことと相俟って、一層能率的に規格化された製品の生産を行うことを可能にしたのであった。また、彼等は低コストで飼育することの出来るバターミルクを豚の生産に使用し、仕事の軽い冬季に従事する副業として養鶏を加えたが、それ等の製品は伝統的にオートミール粥、ベーコン、玉子、チーズ、バター・トーストをとるイギリスの朝の食卓という既存の市場にその販路を見出したのである。斯くて、デンマークのこれ等の製品の輸出額は1880年代の初期から1914年までに10倍の増加をみせたのであった。<sup>17)</sup>

ところで、この時期には工業化は欧州大陸でも進展しつつあった。そしてその様な進展はベルギーとフランスの両国においても顕著であったが、19世紀の後半に真に目覚しい発展がみられたのはドイツにおいてである。このドイツの工業化は周知の如く、国家の役割が大きなウェイトを占め乍ら19世紀を通じて先進西欧諸国への追跡過程として始まったのであるが、先進国との間に存在する大きな生産力格差がドイツの経済発展に対する重圧ともなってドイツ工業化の初期のテンポは緩慢であり、1815年から1850年にかけての工業化の歩みは緩やかな部分現象に留まったのであった。しかし、〔1834年の関税同盟の成立と鉄道の建設を経た〕1850年を境にドイツ経済は持続的な成長過程に入り、この上昇局面の大きなうねりは〔普仏戦争の勝利や帝国の発展と共に〕1870年代初期にまで及び、1873年の恐慌以後1890年代中期までドイツ経済は世界的な大不況の中で一定期間成長の鈍化を経験したが、その後第一次大戦の勃発まで再び一段と規模の大きい成長加速がみられたのである。<sup>18)</sup> 大戦前夜の1913年には世界の工業生産を100とした場合の各国のシェアでアメリカの35.8、イギリスの14、フランスの6.4、ロシアの5.5に対し、ドイツは15.7を占むるに至っていた。<sup>19)</sup> そしてこの過程は、ドイツ労働者の一般的な生活水準の画期的な上昇と、欧州住民の可成りの部分に対して極めて活気づける影響を及ぼしたロシア、スカンディナヴィア及びドナウ河流域諸国とのドイツの

通商関係の開始とを伴い乍ら、曾てイギリスで経験したものと類似した「人口の増加」と「都市化」を齎したのであった。<sup>20)</sup>

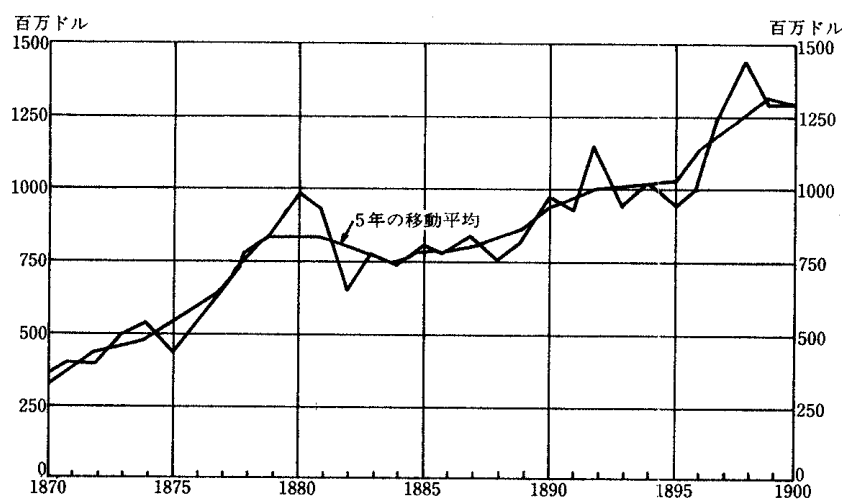
農業はこのドイツにおいてはイギリスにおける程には疎かにされなかったが、またフランスと同じ程度には注意深く保護もされなかったのである。そして、この事実はイギリスを超越するという熱意を以て特徴とするドイツ工業化の殊に前半を通じて顕著であったが、加えて 1870 年代以降の時期に関しては、購入し得る外国農産物の価格が既述の如く著しい低落状態にあったのである。この期のドイツにおける都市と工業の発展と農業の状態についてクラプムは次の如く述べている。「2,000 人以上の人口の共同生活体が都市とされている帝国に関する通常の統計的分類をとれば、人口の 63.9 % が 1871 年に依然として農村にいた様である。次の 40 年間に起ったことを次の表は示している。この数字は全国民が都市に殺到していることを示している。この殺到は最大の都市へが最大であった。1890 年に 10 万人以上の住民のいる都市にドイツ人口の 11.4 % が住んでいた。1910 年にはその数字は 21.3 % (13,823,000 人) であった。農村人口は終始殆ど静止したままであり、全人口の著しい増加分は都市に吸収された。近代の農業条件の下でのその様な大きな農村人口の維持は、特にドイツの如何に僅かの地域が本来集約農業に適しているに過ぎないかが考慮される時に可成りの成功であるが、しかし工業と都市の誘引力が非常に強く、換言すれば農村の歯止めが非常に弱かったので、これ等 26,000,000 人の耕作者は後期には外部からの移住手伝い人の大群を必要とした、ということ

年	総人口	農村の割合	都市の割合
1871	41,059,000 人	63.9 %	36.1 %
1880	45,234,000	58.6	41.4
1890	49,428,000	57.5	42.5
1900	56,367,000	45.6	54.4
1910	64,926,000	40.0	60.0

第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係  
 を書留めておこう。農産物の収穫を行うのに農村のドイツ人だけでは不十分であったのである。<sup>21)</sup>と。この事実は国外からの輸入食糧に対する大きな需要の存在を示すものであるが、当時の状況下ではアメリカが最も供給するのに有利な立場にあったのである。

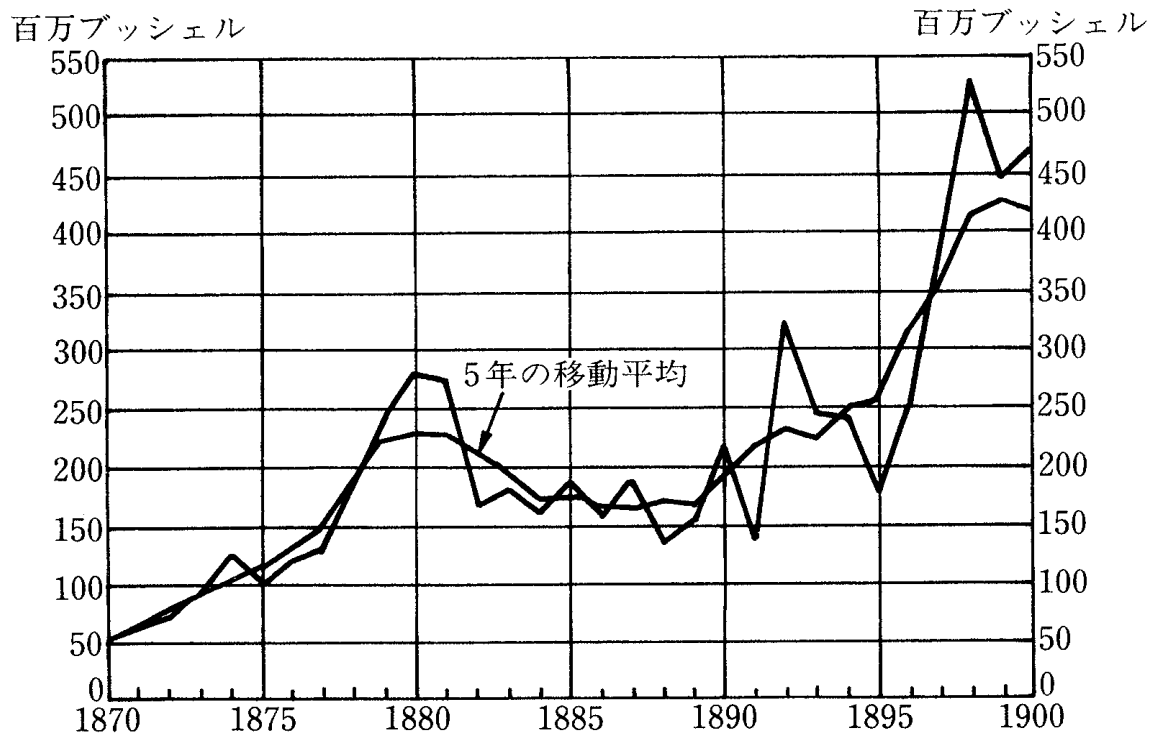
アメリカにおける農地の急速な拡大は 1890 年にはフロンティアを消滅せしめ、主要農産物の生産高を不断に増大させ、それに伴って大量の農産物が市場に投入されたために継続的に価格を押下げたが、1890 年代を通じてアメリカが経験した金融恐慌とそれに続いた不況はこの低価格の傾向を更に一層促進せしめたのであった。斯くて、ドイツ及びその他の欧州工業国はその国の資源が極めて活発に工業の発展に転用されつつあった時期を通じて極めて有利な買入れ市場をアメリカに見出すことが出来たのである。そして、アメリカの処女地の莫大な農産物余剰に対して拡大しつつある吸収力を擁した欧州市場の存在は、19 世紀最後の 30 年間に起ったアメリカの著しい国家的成長を可能ならしめる際における最も決定的な要因の一つであったのである。<sup>22)</sup>この期間を通じての全体としてのアメリカの農産物輸出の増加は図 1 に示されており、いくつかの主要品目については図 2, 3, 4, 5 と表 3 に示される通りである。

図 1 アメリカ農産物の総輸出額の推移(1870年－1900年)



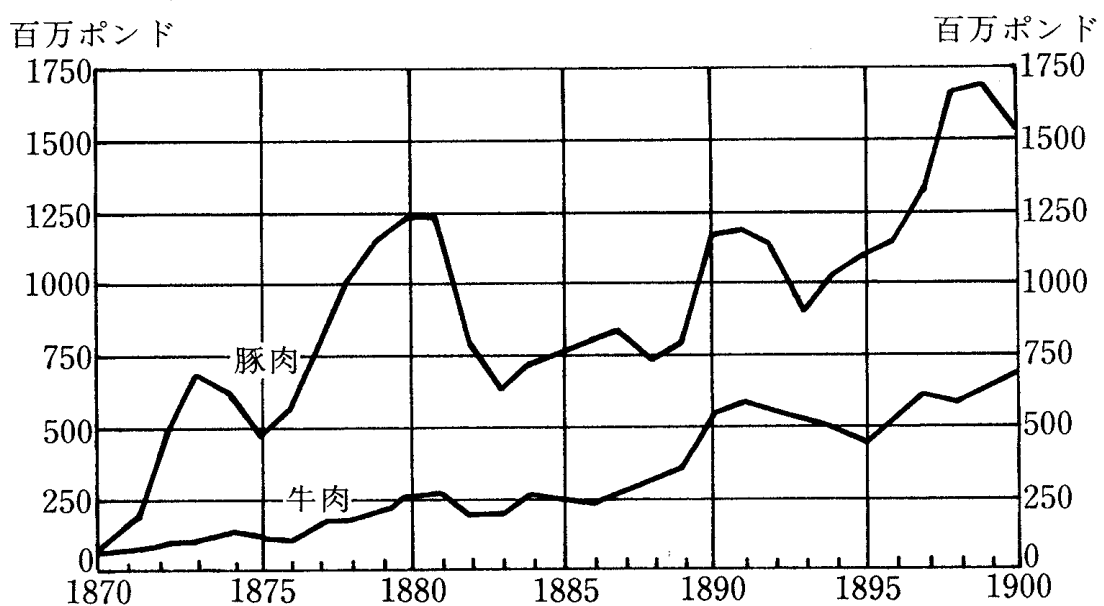
出所：注23)をみられたい。尚、農産物価格水準の変化は修正されている。

図2 アメリカの主要穀物の純輸出高の推移(1870年－1900年)



出所：注23)をみられたい。

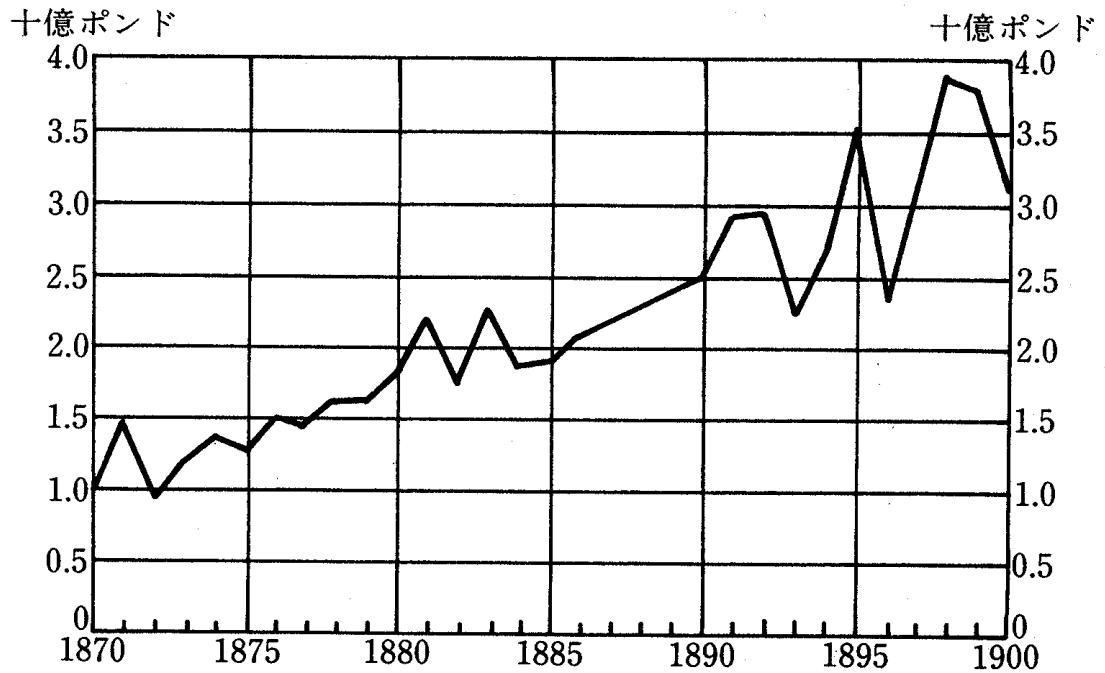
図3 アメリカ産豚肉と牛肉とそれ等の製品の輸出高の推移(1870年－1900年)



出所：注23)をみられたい。

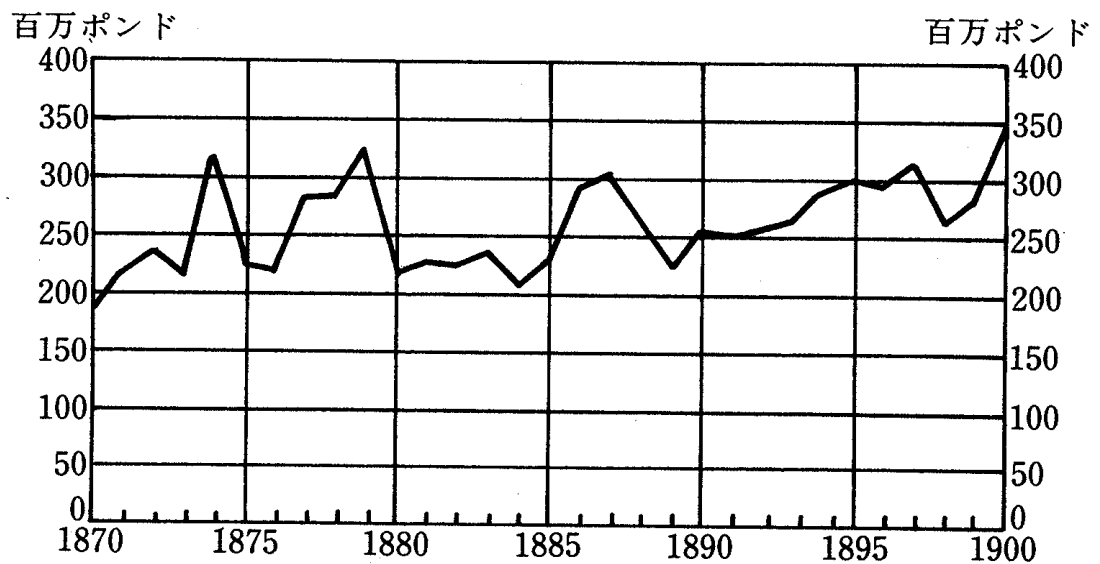
第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

図4 アメリカ産綿花の輸出高の推移(1870年-1900年)



出所：注23)をみられたい。

図5 アメリカ産タバコの輸出高の推移(1870年-1900年)



出所：注23)をみられたい。

表3 5年平均によるアメリカの主要農産物の輸出高の推移  
(1867年-1901年)

年(その6月30日 を以て終る)	小 麦	玉蜀黍	牛肉とその 製品	豚肉とその 製品	綿 花	タバコ
	千ブッシェル	千ブッシェル	千ポンド	千ポンド	千ポンド	千ポンド
1867-71	35,032	9,924	54,532	128,249	902,410	194,754
1872-76	66,037	38,561	114,821	568,029	1,248,805	241,848
1877-81	133,263	88,190	218,710	1,075,793	1,738,892	266,315
1882-86	121,675	49,992	225,626	739,456	1,968,178	237,942
1887-91	115,529	54,606	411,798	936,248	2,439,650	259,248
1892-96	170,624	63,980	507,177	1,052,134	2,736,655	281,746
1897-01	197,427	192,531	637,268	1,528,139	3,447,910	304,402

出所：注23)をみられたい。尚、小麦と玉蜀黍にはそれ等の粉も含まれている。

以上、南北戦争以降19世紀末に至る期間におけるアメリカ農産物の欧州への輸出についてみてきたが、この略半世紀の間にアメリカ農業が受けたあらゆる影響の中でも貿易による影響程に重要なものはなかったのであり、特に1870年から1900年までの30年間には穀物、肉と肉製品、綿花及びタバコ等の主要産物の着実な増加を伴った極めて大量の農産物が輸出されたのであった。斯くて、アメリカからの農産物の輸出は西欧の農業構造を分解させ、急速な工業化と急激な人口増加を伴った都市化を可能にすると共に、アメリカの鉄道や工業の建設等に際しての欧州からの大規模な借入れを可能にし、債務国アメリカの元利の支払いに大きく貢献したのである。

しかし、この時期の農業がこの様に欧州市場に対して極めて大きな依存状態にあり、逆にまた飽くことを知らない欧州市場がアメリカの農業生産の急速な発展の重要な要因ではあったにしても、次の点には注意を払う必要があるであろう。第一は、この豊富な農産物を生産した農業がともすれば急速なフロンティアの伸張、新しい土地の占拠、外国からの移民の流入等を伴って、広大な処女地に対する性急で向う見ずな感情の赴くままに推

第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係  
進されたということであり、費用や価格、労働や投資への報酬等を考慮した注意深い計画に基づいて遂行されたものではなかったということである。第二は、その様な生産条件の下で生産された産物が農民に破滅を齎す程の低価格で広い地域で長期に亘って販売されたということである。第三は、アメリカが農業史上最も途方もない特売場を運営していたことが主たる理由のために、欧州の市場がアメリカからその必要とする数量の農産物を吸収したのだということである。<sup>24)</sup>しかし次にみる如く、欧州のアメリカへの食糧と工業原料の依存関係は決して絶対的なものではなかったのである。

注 1) Edwin G.Nourse, *American Agriculture and the European Market* (New York : McGraw-Hill Book Company, Inc., 1924, reprinted 1972, New York : Johnson Reprint Corporation), p.7 ; Harold U. Faulkner, *The Decline of Laissez Faire, 1897-1917* (New York : Rinehart & Company, Inc., 1951), p.334.

2) Edwin G.Nourse, *op. cit.*, pp.16-17. 表1は p.17.

3) Harold U. Faulkner, *op. cit.*, p.334.

4) この綿花は 1880 年には 2 億 1200 万ドルと評価される 18 億 2200 万ポンドが輸出され、1908 年には 4 億 3800 万ドルと評価される 38 億 1700 万ポンドが輸出されている。他の農産物でこの数値に対応し得たものはなかっただけでなく、後にみる如く、20 世紀に入って肉類や小麦等の輸出が減少する中で、この様に綿花に対する外国の需要は依然として強力であり続けたのであり、アメリカの最も貴重な輸出商品であったのである。数字は *Historical Statistics, Colonial Times to 1970*, part 2, pp.898-899, series U274-294 による。

5) Edwin G.Nourse, *op. cit.*, p.18 ; Harold U.Faulkner, *op.cit.*, p.334.

6) Shepard Bancroft Clough and Charles Woolsey Cole, *Economic History of Europe*, 3rd ed. (Boston : D.C.Heath and Company, 1967), pp.563-564 ; Shepard B.Clough, *European Economic History : The Economic Development of Western Civilization*, 2nd ed. (New York : McGraw-Hill Book Company, Inc., 1968), p.331.

7) Shepard B.Clough, *op.cit.*, p.331. 尚、確かにアメリカの農産物輸出が大きな脅威を与えたことは事実であるが、この時期については次の点

にも併せて考慮を払う必要があるであろう。ドイツと広大なロシアの穀倉地帯にも略同じ時期に鉄道が建設されており、ハムブルク或いはオデッサからの水路による相似た輸送費の引下げも達成され、東欧での安価な労働力に依存した農産物が西欧に著しい低価格で齎されたこと、また1869年に開通したスエズ運河は1874年までにはインドやオーストラリアからロンドンへの運賃を引下げ乍ら広く利用されるに至っており、特にオーストラリアが肉類の輸出に加えて、ドイツ、フランス、スペインを犠牲にして価格を50%引下げ乍らその羊毛のイギリスへの輸出を1850年の39,018,000ポンドから1910年の505,197,000ポンドへと増加させていること、中国や日本が良質の蚕、安価な労働力と輸送コストの故に欧州の絹の生産者より著しい低価格で絹を輸出したこと等がそれである。Cf. Shepard B. Clough, *op.cit.*, pp.331-332 ; Shepard Bancroft Clough and Charles Woolsey Cole, *op.cit.*, pp.564-565.

- 8) *Ibid.*, pp.331-332 ; Shepard Bancroft Clough and Charles Woolsey Cole, *op.cit.*, pp.564-565. 尚、南北戦争後のアメリカ農民は西欧への大量の農産物輸出によって大なる繁栄を享受したかに思えるが、実際には伝統的にアメリカの経済社会で債務者の立場に置かれていたことに加えて、この物価の長期低落期に農産物価格の著しい低落がみられたために、それ等が他の要因と絡み合って寧ろそれとは裏腹に苦境に立たされ、社会的に恵まれない立場を余儀なくされていたのである。従って、インフレを求めてのグリーンバック党の結成やフリー・シルヴァー運動、また大企業特に鉄道会社の（独占的）横暴からの保護を求めてのグレインジャー運動等と、延いてはポピュリズムの運動へと連なる一連の改善と改革を求める政治運動を展開したのであるが、ここではそれ等については触れないことにする。
- 9) H.T.Williams (ed.), *Principles for British Agricultural Policy* (London : Oxford U.P., 1960), pp.3-4.
- 10) *Ibid.*, p.6.
- 11) Frederic Austin Ogg and Walter Rice Sharp, *Economic Development of Modern Europe*, revised ed. (New York : The Macmillan Company, 1926, 11th printing, 1950), p.155. 表2は p.156.
- 12) Brian R. Mitchell, *European Historical Statistics, 1750-1970* (London : The Macmillan Press, Ltd., 1975), pp.209, 226. 中村宏監訳『マクミラン世界歴史統計(Ⅰ)ヨーロッパ篇 1750年-1975年』(原書房 1983年 これは1980年刊第二版の邦訳) 219, 236頁。
- 13) *Ibid.*, pp.248, 266. 同上 263, 281頁。
- 14) Frederic Austin Ogg and Walter Rice Sharp, *op.cit.*, p.156.
- 15) H.T.Williams (ed.), *op.cit.*, pp.5-6.



### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

- 16) Edwin G.Nourse, *op.cit.*, pp.19-20 ; Shepard Bancroft Clough and Charles Woolsey Cole, *op.cit.*, pp.564-565.
- 17) Shepard B.Clough, *op.cit.*, pp.332-333.
- 18) 高橋秀行「工業国家ドイツの成立」(荒井政治 竹岡敬温編『概説西洋経済史』所収 有斐閣 昭和55年) 183, 185, 189 頁。
- 19) Douglass C.North, *Growth and Welfare in the American Past : a new economic history* (Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall, Inc., 1966), p.28.
- 20) Edwin G.Nourse, *op.cit.*, p.21.
- 21) J.H.Clapham, *The Economic Development of France and Germany, 1815-1914*, 4th ed. (London : Cambridge U.P., 1936, reprinted 1963), pp.278-279. 林達監訳『フランス・ドイツの経済発展 1815年—1914年』(学文社 昭和49年) 下巻 316—317 頁。
- 22) Edwin G.Nourse, *op.cit.*, pp.22-23.
- 23) *Ibid.*, pp.24-27. 図1は p.24, 図2, 3は p.26, 図4, 5は p.27, 表3は p.25. 尚, 図1は全ての外国市場への農産物輸出額の総計を示している。従って, 非欧州の港に向う商品も含まれている。しかし, その量はアメリカの輸出の著しい発展以来ずっと増加してきたが, 世紀末においてさえ相対的に些細なものであり, 1896年—1900年の5年間に於いて非欧州市場に向った農産物は全体額の僅か12%に過ぎなかった。然も, 全体の3.38%はカナダへの輸出品から成っており, そしてその主要部分は確かに最終的にはカナダの港を経由して欧州市場に向ったのであった。それ故, 農産物の輸出が著しい成長を開始した時から世紀の終りまでに欧州に向う農産物が全体の少なくとも90%にならなかった年はなかったと考えても差支えないのである。その上, 非欧州諸国に輸出された僅かな割合の農産物は西インド諸島, 南アメリカ, カナダ或いは東洋等の諸国に輸出された果物, 酪産品, 米その他といった主として副次的な品目から成っていたのである。これに対して本稿の対象である欧州に輸出されたものは, 欧州向けがその輸出の殆どといってよい程の量を占める大量の綿花, 穀物及び肉と肉製等といった主要商品から成っていたのであり, 例えば欧州向け輸出の総輸出高に占める割合は平均して生牛肉が略99.5%, 綿花が98%, ベーコンが93%, タバコが92%, 小麦が91%に達していたのである。 Edwin G.Nourse, *op.cit.*, pp.23, 25.
- 24) *Ibid.*, p.28.

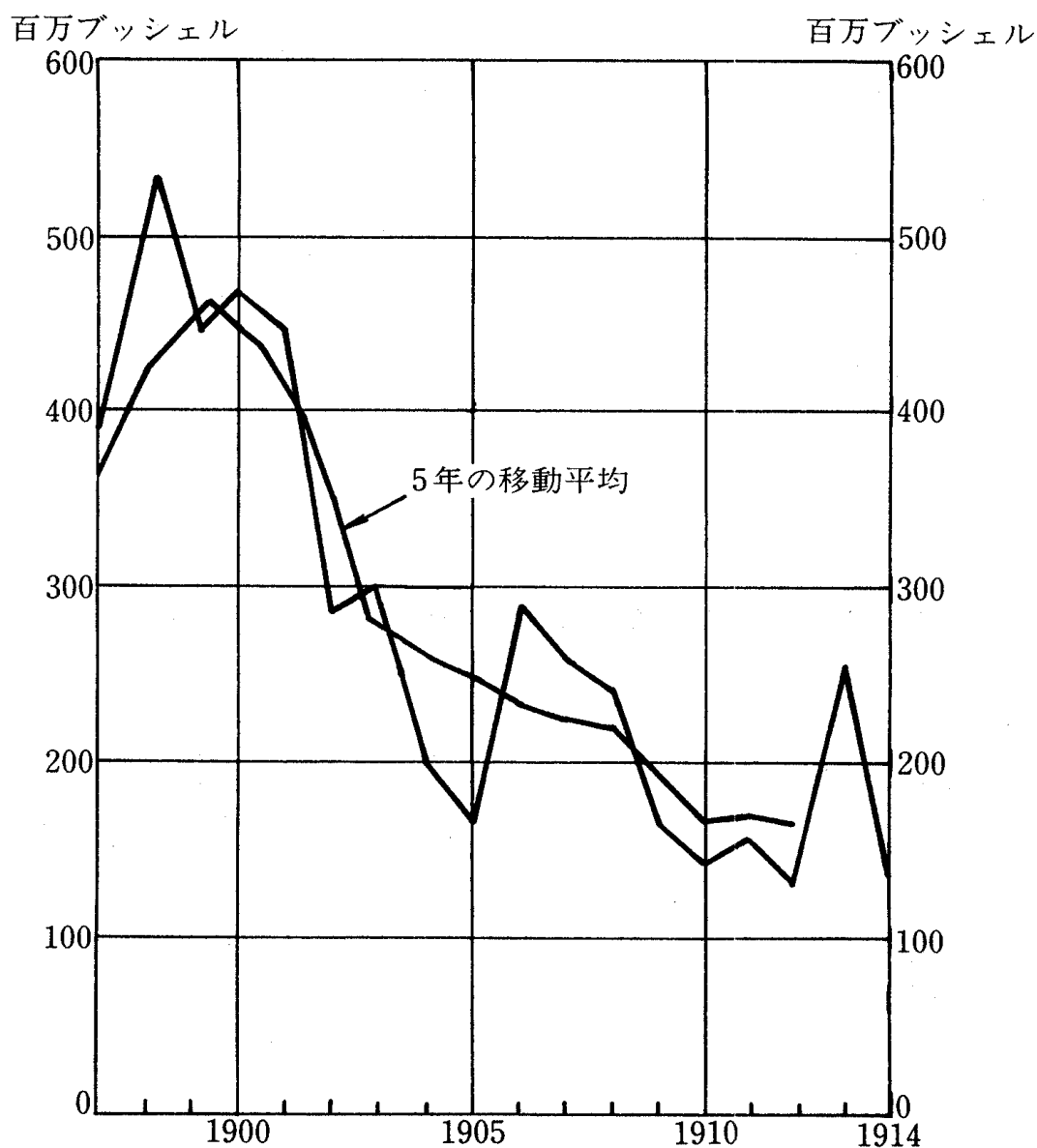
### 3

20 世紀に入った時、アメリカの農産物輸出に関する限りその様相が一変し、第一次大戦の勃発以前の略 15 年間を通じてアメリカの農産物輸出国としての地位は著しく低下したのであった。確かに、南北戦争以後アメリカが工業国として成長するにつれて総輸出額に占める農産物の輸出の割合が 1870 年の 79 % から 1901 年の 65.2 %、そして 1914 年の 47.8 % へと相対的に低下を余儀なくされたことは止むを得ないことであったが、問題は図 6、7 に示される如く、略世紀の転換期を境として農産物特に食糧の輸出高が著しく減少したことである。生牛肉の輸出は 1901 年の 3 億 5200 万ポンドから 1914 年の 600 万ポンドへと、ベーコンの輸出は最高であった 1898 年の 6 億 5000 万ポンドから 1910 年の 1 億 5200 万ポンド、そして 1914 年の 1 億 9400 万ポンドへと減少した。ラードの輸出は後述する如くアメリカの特別な有利性の故により良く維持し得たが、それでも 1899 年の 7 億 1100 万ポンドから 1910 年の 3 億 6300 万ポンド、1914 年の 4 億 8100 万ポンドへと下がったのであった。小麦と小麦粉の輸出高の戦前のピークは 2 億 3500 万ブッシェルであった 1902 年であり、1914 年には 1 億 4600 万ブッシェルに下がったが、1905 年には 4400 万ブッシェルと極めて低く、1910 年から 1912 年には平均して 7900 万ブッシェルよりも少なかったのである。玉蜀黍とその粉の戦前のピークは 2 億 1300 万ブッシェルであった 1900 年であり、1914 年には 1100 万ブッシェルより少ないまでに減少したが、これはそれに先立つ 10 年間の平均よりも下であった。そして、南北戦争の終る 1865 年の 4000 万ポンドから 1881 年の 1 億 8000 万ポンドへと上昇してきたバターとチーズの輸出高は、1898 年には 7900 万ポンドを示したが、1914 年には僅か 600 万ポンドを示したに過ぎな<sup>1)</sup>かった。

ところで、1870 年から 1914 年に至る農産物の総輸出額の推移は図 8 に

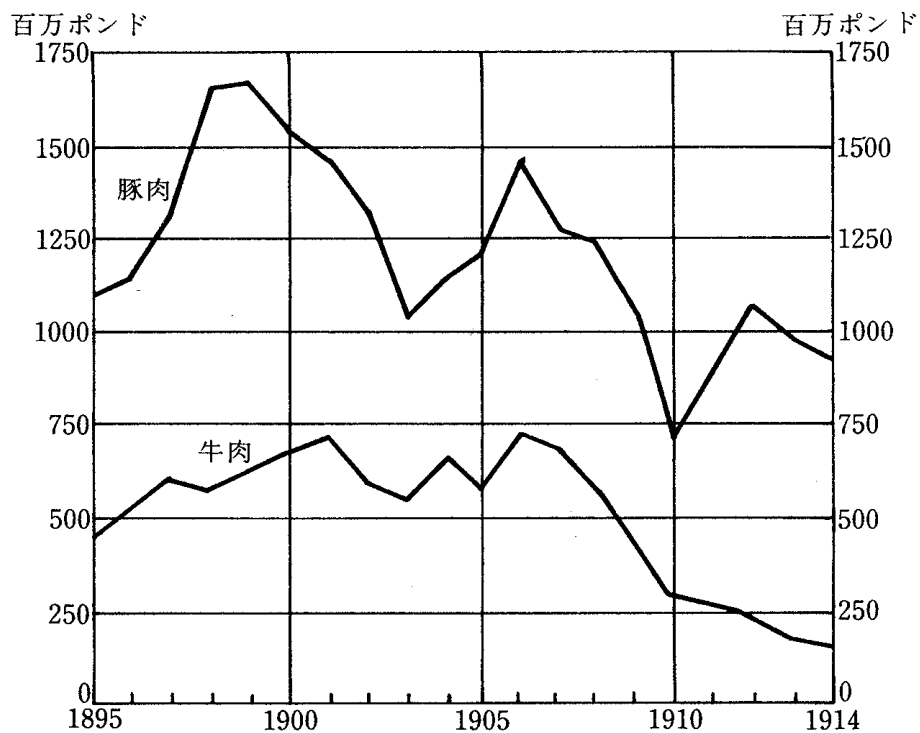
第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係  
示されるが、それによれば総輸出額は略 1900 年以降減少してはいるもの  
の、先の穀物や家畜製品等の輸出の際にみられた様な著しい割合では決して  
減少してはいないことが看取されるであろう。これは粗大且つ嵩高な農  
産物の輸出は減少したが、綿花とタバコの輸出額がこの期においても可成  
り安定した増加率を持続したことと、米、綿実油、綿実の搾め滓、及び生

図6 アメリカの主要穀物の純輸出高の推移(1897年－1914年)



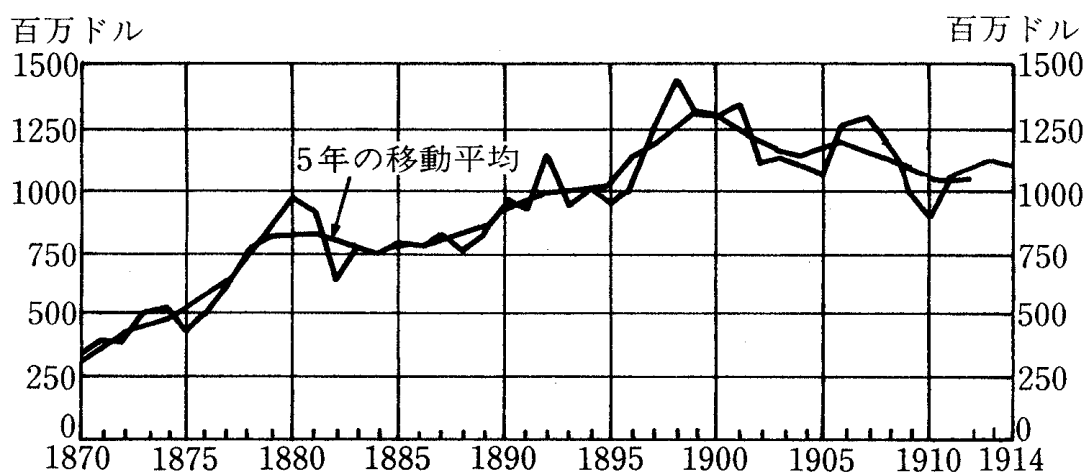
出所：注1)をみられたい。

図7 アメリカ産豚肉と牛肉とそれ等の製品の輸出高の推移  
(1895年－1914年)



出所：注1)をみられたい。

図8 アメリカ農産物の総輸出額の推移(1870年－1914年)



出所：注2)をみられたい。尚、農産物価格水準の変化は修正されている。

### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

や缶詰や乾燥させた果物類等の輸出高が現状を維持するか乃至は増加したことによるものであった。様々な輸出品の価値表示での相対的な重要性の変化は、綿花の全農産物輸出額に占める割合が1900年（6月30日で終る会計年度）の30%未満から1914年に55%に達していること、また同年で穀物のそれが31%から15%に減少し、肉と肉製品が21%を僅かに上回る割合から14%より下に低下したことによって示されるであろう。他方、タバコは3.4%から4.8%へと増加を示し、一括した残余の農業輸出品は僅か乍ら減少を示したのであった。また四つの主要輸出作物の外国市場への依存関係については、綿花が最も安定しており、1900年の綿花収穫高に占める輸出の割合は66.30%で、1913年が62.56%、そして両年間を通じて平均して3分の2に達したのであった。小麦の場合の割合は同年で35.84%から19.07%に、玉蜀黍のそれは7.24%から0.44%へと減少している。タバコの場合は38.78%から47.16%へと増加を示したが、実際のこの期間の平均は42.47%であり、1890年代の45.5%よりも低かったのである。斯くて、綿花、タバコ及び果物類を除けば、農産物の輸出高は略1880年代の水準にまで低下したのであった。と同時に、綿花とタバコの輸出額の増加は、それ等が事実上欧州の農業に関する限り非競合的であり、欧州のアメリカ南部への依存関係が継続的であったことを示すものであり、穀物と家畜は欧州の農業と、そしてまたアルゼンチン、オーストラリア及びその他の新しい地域での農業と直接競合するものであったのである。<sup>2)</sup>

また、既に指摘した如くアメリカの農産物輸出の主要仕向先は西欧であり、表4に示される如く、1895年から1899年には平均して欧州はアメリカの農産物輸出額の88.2%を占めたのであるが、1910年乃至1914年のそれは83.9%へと低下したのであった。また、西欧での主要輸入国はイギリスとドイツであったが、アメリカの農産物輸出額に占める両国の輸入の割合は、イギリスが1895年乃至1899年の53.4%から1910年乃至1914

表4 アメリカの農産物の総輸出額に占める欧州諸国の割合

	1895年—1899年	1910年—1914年
イギリス	53.4 %	37.47 %
ドイツ	13.6	20.34
フランス	6.2	8.11
オランダ	4.7	4.68
ベルギー	3.8	3.01
その他の諸国	6.5	10.29
欧州全体	88.2	83.90

出所：注3)をみられたい。

年の略37.47%へと低下したのに対して、ドイツのそれは13.6%から20.34%へと増加をみせたのであった。この様にイギリスの市場は低下したが、それに代って僅か乍らカナダ、メキシコ、キューバ及びその他のラテン・アメリカ諸国の市場がアジアの市場と並んで拡大したのである。イギリスの著しい減少の理由は小麦、小麦粉、玉蜀黍、牛肉とベーコン等の購入の低下によるものであったが、それは後にみる如く輸入先の大きな変更と密接に関係していた。特に小麦の総輸出高に占めるイギリスの輸入の割合は1900年乃至1904年の平均53%から1909年乃至1913年の39%へと低下し、小麦粉のそれは同期で51%から27%へと減少したのであった。同国はまた生牛肉の殆ど唯一の輸出先であったが、それも1900年の3億2600万ポンドから1913年の700万ポンドへと激減している。尚、綿花についてはイギリスが主要輸入国であったが、その総輸出高に占める同国の割合は1900年の44%から1912年の41%、1913年の36%へと僅か乍ら減少をみせ、これに対してドイツは同年で25%未満から27%、30%へと増加させたのであった。次いでフランスが輸入高を増加させ乍ら第三位を構成した。また、タバコの総輸出高は1900年の3億500万ポンドから1912年の4億1100万ポンド、1913年の4億4400万ポンドへと増加し

### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

たが、1900年から1913年にかけてイギリスが第一の取引先であり、1億乃至1億5000万ポンドを輸入したのに対し、それに続くドイツ、イタリア、フランスは各々略3500万乃至4000万ポンドを購入し、オランダ、スペイン、ベルギーがそれに続いたのであった。<sup>3)</sup>

そこで、この様な戦前期の食糧を中心として国際通商においてみられた大きな変化が何故生じてきたのかが次に問題となるのであるが、それに関して我々は先ず第一に主要な欧州諸国の農業政策に注意する必要があるであろう。アメリカからの安価な輸出品との競争に直面して以来、特にフランスとドイツの生産者は大きな痛手を感じてきたが、経済的であると同時に政治的な理由が彼等の動向と相俟って、「欧州の大陸諸国は政府補助金、関税及び特別運賃率によって農業を強化させようとする新重商主義に基づいて経済的な自給政策を再び強化させ始めた」<sup>4)</sup>のであり、それに伴ってアメリカ農産物の激しい流入は関税率の継続的な引上げによって抑制されるか、或いは豚肉製品の様な場合には衛生上の理由に基づいた通商停止によって完全に停止されるに至ったのであった。<sup>5)</sup>フランスの様相はクラパムによれば次の如くである。「しかしメリーヌ関税でさえ最後の言葉ではなかった。1897年に小麦関税が5フランから7フランに押上げられた。翌年バター関税が再び上昇した。葡萄酒関税は1899年に改訂され引上げられた。1903年には牛と食肉の関税率が上がった。その詳細はこれ以上追求する必要がない。1914年まで原則に変更はなかったが、既に検討した如く甜菜糖製造業は輸出補助金を失い、従って苦しんだのであった。最近のフランス農業は強固な関税障壁の背後で営まれていると考えなければならない。もしこの一つの目的がフランスのパンの自給を達成することであったならば、成功であったといえるかも知れない。…1886年乃至92年に小麦の平均純輸入は国内生産の略7分の1であったのに対して、1896年乃至1902年には17分の1もなく、1906年乃至12年には略13分の1であったのである。」<sup>6)</sup>と。斯くて、フランスは相当の犠牲を払ってその必要と

するものの殆どを自給しており、その理由の一部は輸出の停滯や、輸入食糧の処理に関する国内工業と安価な原料を必要とする輸出食品工業を発達させなかったことに起因したものであり、その様な政策がどの程度経済的動機に基づき、どれ程が政治的乃至は軍事的なものであったかに言及することは困難であるが、その維持していた海軍力や商船に対して効果的に為され得る封鎖の脅威を擁しているその地理的条件とそれまでの歴史的背景から、フランスが切迫しつつあった国際情勢下で農産物特に食糧に関して自給を確保せんとするその期待をどうにかする必要があったことも亦否定出来ないであろう。

国家による農業政策が著しく成功を収めたのはドイツにおいてであったが、そのドイツでは政治的乃至は軍事的な動機が一層明白であり、それがフランス以上に地理的に不満足な位置に在ったことと相俟って、帝国のための自給政策が率直に主張されたのであり、その政策を実施するために国産助成金、対外関税及び特別運賃率といったものが完全な形で維持されたのであった。周知の如く、オットー・フォン・ビスマルクは東プロシアのユンカーの出身であり、関税その他の政策において彼等の立場に同意しただけではなくそれを代表していたのであるが、それ等の政策は外国との競合に鑑みてドイツの農業を維持せんがために立案されたものであった。しかし 1890 年のビスマルクの辞職後、カプリーヴィ伯 (Leo, Graf von Caprivi) 等の彼の後継者は 1890 年代を通じての国外での低価格を認めると共に、都市の大衆に対する一般的な懐柔政策の一環として一層低度の保護貿易主義に基づいて政策を遂行したために、農民の運動を復活させ強化せしめるに足る大量の輸入が齎されたのであった。そして長い活発な運動の後、農民の一層完全な保護貿易を求める要求は 1902 年の新農産物関税<sup>7)</sup>によって十分に満たされたのであった。

これに加えて、欧州の大陸諸国は全体としてその国の農民階層を維持乃至は再興するために努力をしていたのであるが、その様な努力は 19 世紀



### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

後半に急速な発達をみせた新しい科学的農業についての知識によって助けられたのである。一層の自給のための期待と時間を与えられて、ドイツは化学肥料の使用を増加させると共に、その生産を最も容易にその資源によって生産し得る作物へと変更し、農業労働力を輸入し、これによってドイツの工業化開始と共に生じてきた農業の衰退傾向を全く効果的に塞止めたのであった。馬鈴薯の栽培はその国民経済において先例のない重要な地位に押上げられ、甜菜の栽培は最も科学的な方法で促進され、豚の生産は1873年と1912年の間に3倍加したのであった。これに伴って、例えばアメリカのドイツへの玉蜀黍の輸出高は1897年から1900年までの4年間で年平均略4000万ブッシェルに達したのであるが、第一次大戦の開始前年にはそれが僅か600万ブッシェルへと激減していたのである。これは蒸留物の原料としての馬鈴薯の大きな成長と、また馬鈴薯とビート・パルプの家畜飼育への使用の増加によるものであり、アメリカのベーコン、ハム、肩肉の輸出高は1898年の5800万ポンド以上から1914年には僅か100万ポンド程度へと激減したのであった。但し、アメリカのラードの輸出高は1914年まで著しい減少傾向はみせていないので一般的な傾向の例外といえるが、それはドイツでの豚の著しい増加がラード生産用というよりも寧ろ食肉用の豚についてであったということである。ドイツはそうせざるを得なかった馬鈴薯と大麦での豚の飼育によってベーコン、ハム、ソーセージ類に対する国内の需要の大部分を満たすことが出来、他はそれを生産する近隣諸国から輸入し得たのであるが、しかしその必要とする動物性脂肪<sup>8)</sup>に関しては国産のラードを十分には供給出来なかったのである。

次に、1890年代後半以降のアメリカの食糧に対する欧州特にドイツとイギリスの輸入高の減少の第二の理由として、その他の供給源の発展があったことが指摘されなければならないであろう。ドイツのロシアとの関税戦争は1894年に終り、それ以降ドイツはその工業製品のための市場をロシアやドナウ河流域諸国に開拓してきたのであり、その代りにこれ等の農

業地域からの農産物の輸入を次第に増加させたのであった。そして全く同様の貿易パターンは、ドイツの拡大しつつあった財政力と海運業の既に手の届くところとなっていた南アメリカやその他の非工業地域との間においても展開されたのである。<sup>9)</sup>

また、農産物輸入に関してのアメリカから他の供給地へのこれと同様の移行はイギリスの場合にも著しかったが、この場合にはまた一層深い意味を持っていたといえよう。何故ならば、イギリスはどの欧州諸国よりも、またそれ等全部を合せたものよりもアメリカから遙かに大量の農産物を輸入していたからである。フランス、ドイツの農業政策とは異なり、イギリスの場合は農産物の自由貿易政策を追求してきたのであり、より新しい諸国からの競争に直面して自己の立場を維持していくことが出来る様な地位にその農業が納まることを容認し乍ら、同時に活発な商業上、工業上の発展、卓越したその財政力、大量の商船と海軍力等に大きく依存してきたのであった。しかし、イギリスはアメリカの輸出史を通じて比類なく重要且つ申し分のないアメリカの農産物に対する外国市場ではあったが、そのアメリカからの食糧の輸入高は 1890 年代後半から大戦直前までの期間に可成りの減少を示したのであった。とはいうものの、1910 年から 1914 年に至るまでの平均でさえその小麦と玉蜀黍の輸入高はドイツのその 3 倍以上であり、そのハム、肩肉、ベーコンの輸入高は比類のないものであり、またそのラードの輸入高もドイツの大量の輸入高よりも更に 28 % 程多かった<sup>10)</sup>のではあるが。1897 年乃至 1901 年と 1910 年乃至 1914 年の主要西欧三カ国へのアメリカ食糧の輸出高は表 5 に示される通りである。

更に、アメリカの欧州諸国への輸出が減少した第三の理由として、アメリカの国内市場の急速な成長が指摘されなければならないであろう。アメリカの工業は 5 年毎の比較で既に 1884 年には付加価値額で 32 億 1500 万ドル、商品生産に占めるその割合で 44 % と農業の 30 億 100 万ドル、41 % (この割合は他に鉱業と建設業を加えて 100 % である) を凌ぐに至っていた

第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

表5 5年平均によるイギリス、ドイツ、フランスへのアメリカ食糧の輸出高の比較

	イギリス		ドイツ		フランス	
	1897年-1901年	1910年-1914年	1897年-1901年	1910年-1914年	1897年-1901年	1910年-1914年
	千ブッシェル	千ブッシェル	千ブッシェル	千ブッシェル	千ブッシェル	千ブッシェル
小麦	71,735	26,777	9,406	5,825	7,543	7,637
玉蜀黍	74,101	10,168	36,138	4,952	6,380	a
	千ポンド	千ポンド	千ポンド	千ポンド	千ポンド	千ポンド
ベーコン	404,988	129,682	31,026	1,156	6,209	4,670
ハムと 肩肉	171,922	138,982	6,057	a	980	a
ラード	213,986	170,414	202,450	133,361	23,055	15,131

出所：注10)をみられたい。尚、年は暦年であり、a印は個別に記すには余りにも僅かすぎるものを示している。

11)  
が、その後も続いた一層の工業の発展と急速な都市化を伴った人口の増加がフリー・ランド期の過度に活気づいた農業の発展に追付きつつあったのである。実際に1895年から1915年に至る期間の工業の成長率は農業のその約3倍であり、より低度のペースで拡大しつつあったアメリカ農業の生産物を吸収し得るに十分な程急速に成長をみせていたのである。然も、農産物価格は物価水準の下落期には最も急速に低下し、逆に上昇期には最も急速に騰貴する傾向にあったが、この国内での需要の増加は農産物価格の上昇と、工業製品を農産物と交換しようとする諸国にとってアメリカからの購入をより魅力のないものにするに十分なインフレを伴っていたのであった。確かに、この時期を通じての物価の上昇は世界的な傾向ではあったが、重要な事実アメリカ農産物の主要市場であったイギリスにおいてよりもアメリカにおいて物価がより一層急速に上昇したということである。斯くて、この問題は既述の他の供給源への移行と密接な関係を持つに至るのであるが、欧州のどの工業国もその必要とする農産物の輸入先を地理的な近さ、国家的な絆、工業の低開発状態等の理由によってか、或いは結局は単作農業に落着いている早くからの農業の発達によって最も有利な

取引条件を提供した地域へと変えたのであった。そして様々の状況から、これ等全ての条件は 20 世紀の開始以降の時期においては、アメリカよりもロシア、カナダ、アルゼンチン、オーストラリア及びインド等においてより良きものが見出されたのである。しかし、これはその他の農業地域の引付ける力が強化されたものと看做すよりも、寧ろアメリカが差出した誘引力が相対的に弱まったもの<sup>12)</sup>と考えるべきであろう。但し、綿花は輸出を目的としてアメリカが大きな力を注いできた作物として顕著であり、また既述の如く穀物や肉類等の輸出高の大幅な減少とは著しく対照的であったが、それは世界の他と比較してアメリカが卓越した自然上の利点を持っていたからである。即ち、南部の最も恵まれたデルタ地帯や南西部の一定の灌漑が施された地域に苗木は良く順応し、最良の条件と方法の下で栽培することが可能であったためであり、確かに長繊維の綿花のいくらかは自己消費のために輸入する必要があったが、アメリカはその生産を一層増加させ得たのであった。

以上にみた如く、いくつかの理由によって略世紀の転換期から大戦の勃発に至る期間に、若干の例外を除いてアメリカの農産物輸出が食糧を中心として著しく減少したことは、疑いなくこの期のアメリカ農業の最も落胆的な局面であった。にも拘らず、アメリカ農業は南北戦争以降、そして特に 1893 年の恐慌とそれに続く不況期に農産物価格の下落によって著しい辛酸を舐めたが、1897 年に回復の兆が現れると共にそれ以後第一次大戦まで農業所得が増大したために、農民は平時のアメリカ農業史上最も繁栄した時期の一つを享受したのであった。時の農務長官ジェイムズ・ウィルソン（共和党）が増加した農業所得は「<sup>13)</sup> 抵当に対する支払いを全部済ませ、銀行を設立させ、より良い家屋を建てさせ、農民が世界の市民になるのを助長してきたし、それは彼の土壌を改良させ一層生産的なものにするための手段を彼に提供してきた」と述べたのであったが、とりわけ 1909 年乃至 1914 年の期間がパリティ価格の依拠する基準年としても選ばれた如く、

### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

この時期はアメリカ農業にとって最も理想的な状態の時期と（少なくとも 1946 年までは）看做されてきたのである。

では、それは何故であったか。1897 年から 1914 年までの期間は殆どの商品の価格上昇を伴った全般的な繁栄期であったが、この景気上昇への転換の最も重要な契機こそアメリカ小麦に対する欧州の莫大な需要にあったのである。1897 年におけるフランスの旱魃、オーストリア、ロシア及びバルカン諸国の洪水等による生産の減少で欧州の生産高は前年（1896 年）に比べて約 30 %（3 億 5000 万ブッシェル）低下し、約 1 億 5000 万ブッシェルの小麦を 1897 年の収穫後の 1 ヶ年以内に輸出したのであった。それは 1896 年の殆ど 2 倍であり、1898 年を通じて 1 億 2000 万ドルの金の流入を齎したが（この流入は 1891 年の秋以来のことであった）、それは穀物生産地域を潤したばかりでなく、1896 年以降の新しい金鉱の発見や新精錬法の導入等による金生産の増加と相俟ってアメリカの 1900 年の金本位制の確立に大きく寄与すると共に、同制度下での通貨を膨脹させたのであった。<sup>14)</sup> 然も、食糧を中心とした輸出の減少に鑑みて輸出可能な余剰の生産はアメリカの農業制度の一部として残ったのであるが、急速な人口の増加がみられ、工業が農業を上回るハイスピードで都市化を伴って成長していたのであり、この様な国内での販路の拡大が低落した欧州市場を埋め合せたために、全般的に農民はこの繁栄期により一層の繁栄を享受することが出来たのである。換言すれば、金インフレと繁栄する国民の総需要が増加する中で、世紀末に至って食糧に対する需要が供給に追いつき始めつつあったのであり、その結果農産物価格が農民の購入する必要のある他の商品の価格に比べて相対的により上昇し、農民に農産物の交換価値の有利性を齎したのであった。その事実は表 6 に示されるが、それによれば農民が当時可成り裕福であったことは明らかである。因に、1899 年を 100 とすれば農産物の価値は 1905 年には 133、1910 年には 189 まで上昇し、1899 年と 1909 年の間に 10 の主要農産物の価値が 72 % 上昇したのに対し、農民

が購入しなければならなかった商品のそれは僅か 12 % 増加したに過ぎなかったのである。<sup>16)</sup>

ところで、既述の如くこの期の農業生産の増加が工業や鉱業のそれと同じ程に急速でなかったことは事実であるが、農業部門の拡大も著しく、その総生産は 1897 年から 1917 年までの 20 年間に 30 % 以上増加し、88 の商品の考察に基づいた NBER の農産物生産指数（1899 年 = 100）は、1901 年と 1907 年と 1913 年の落込み（99 と 110 と 113）を除いて 1897 年

表6 アメリカにおける農業統計データの推移  
(1909年乃至1913年の平均=100)

年	地 価	農場賃金	農作物価格	家畜価格	1エーカー当りの 農作物の価値	農民の購入す る商品の価格
1899	45	68			57	86
1909	93	98	101	95	101	97
1911	99	99	101	90	97	100
1914	111	104	101	112	103	103
1915	123	105	101	104	108	112
1916	136	114	124	122	142	125
1917	153	142	198	181	209	153

出所：注15)をみられたい。

と 1914 年の間で殆ど連続的な上昇をみせ乍ら、1897 年の 95 から 1914 年の 129、1917 年の 124、1918 年の 130 へと増加したのであった。<sup>17)</sup>しかし、他の部門に比べての農業の成長率の鈍化がかえって農民に好ましい影響を与えたのであり、この繁栄期を通じて農産物価格を押下げたり農業所得を著しく低下せしめる程の大きな余剰は存在しなかったのである。換言すれば、可成り安定した均衡が需給間に存在したのであった。

### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

加えて、1900 年以後農地に追加されたエイカー数の割合もそれ以前に比べると遙かに小さく、年平均での農地の増加は同年より前の略 1500 万エイカーに比べて 1900 年以降では僅か約 400 万エイカーに過ぎないものであり、この様な傾向がまた 1900 年以後いくつかの主要農産物の生産に安定した状態を齎したのであった。そしてこれと密接な関係があるのであるが、農民は更に資本の価値の増加からも利益を得たのであった。地価は 1900 年と 1910 年の間に著しい増加を示し、土地と付属建造物の 1 エイカー当りの平均価格は 19.81 ドルから 39.59 ドルへと略 100 % 上昇したが、例えばこの 10 年間にネブラスカ州とカンザス州の農民が各々 157 % と 177 % の地価の上昇を享受した如く、いくつかの州ではその上昇率は一層大きかったのである。<sup>18)</sup>

また、アメリカ農業の相対的な国際的地位の低下に鑑み、少数の主要穀物と家畜製品の余剰を継続的に増加させる代りに、この期のアメリカ農民が試行的にはあるにせよ継続的により一層満足のいく成果が得られる様な新しい傾向の試みへとその生産的努力を変更しつつあったことも指摘されなければならないであろう。そして、この様な変更は国産の砂糖供給を増加させ、酪產品と園芸品の生産高を上昇させ、フレッシュ・ミルクや季節外れの果物と野菜類の都市への供給を増加させたのであるが、この園芸や酪農業といった一層集約的な分野での生産の著しい増加は単に成長しつつある国内市場の需要を満たすだけでなく、アメリカの販路を拡大させ、例えば生や缶詰や乾燥させた果物類といった新しい分野での輸出の増加を可能にし、農業に一層の安定性を齎す筈のものであったのである。<sup>19)</sup>

更に、この戦前期を通じて農業経済学の科学的研究や生産コストの分析を含む農業教育の著しい発展がみられたことが指摘されなければならないであろう。そして、これはその様な研究・調査の成果を普通の一般農民に普及させるための各種の機関の設置へと発展をみせていたのであり、この点でも農業は堅実な事業基盤にのせられつつあったのである。<sup>20)</sup>

斯くて、もし第一次大戦が続いて起こらなかったならば、この再調整の過程は急速にではなくとも合理的に推進され、この様な結果は農民の繁栄を維持させ、全体としてのアメリカの経済的健全性に大きく寄与したであろうと思われるのである。

注 1) Edwin G. Nourse, *op. cit.*, pp. 29-31, 図6は p. 29, 図7は p. 30; Harold U. Faulkner, *op. cit.*, pp. 336-337.

2) Edwin G. Nourse, *op. cit.*, pp. 32-33, 278-284, 図8は p. 32; Harold U. Faulkner, *op. cit.*, p. 337.

3) Edwin G. Nourse, *op. cit.*, pp. 284-290. 表4は p. 285.

4) Harold U. Faulkner, *op. cit.*, p. 335.

5) ここで、大不況期の西欧農民が外国からの輸入品に対して関税による保護を要求し、それを得るために政治的に団結し始めたこと、そして彼等の努力が1870年代末までには可成りの成果を収めつつあったことを指摘しておきたい。フランスの農業者協会(Société des Agriculteurs)が1892年の有名なメリーヌ関税を通過させると共に(尤もこれは穀物関税を変えず、例えば小麦の関税は依然100キロ当り5フラン、1クォーター当り9シリングのままであったが、小麦については既に1881年関税の下での100キロ当り60サンチームから1885年に3フランに、1887年に5フランに引き上げられていた——クラパム)、ドイツでは関税率は1879年、1885年、1888年に引き上げられ、1902年の農産物関税で農業者同盟(Bund der Landwirte)は非常に厚い保護を得たのであった。また、イタリアはその関税率を1878年、1887年、1891年に引き上げると共に、1888年から1899年にかけて(主に葡萄酒をめぐる)フランスと有名な関税戦争を展開したが、自由貿易のイギリスにおいてさえジョージフ・チェイムバリンと彼の互惠貿易主義者達(Fair Traders)によって先導された保護と英帝国内特惠関税を要求する激しい運動が、第一次大戦まで立法化されなかったも



第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係の、みられたのである。しかし、オランダ、デンマーク、フィンランドは高関税への復帰に関心を示さず、これ等の自由貿易諸国は競合し得る産物へとその農業生産を変更させていくという政策を追求したのであった。Shepard B. Clough, *op. cit.*, p.332; Shepard Bancroft Clough and Charles Woolsey Cole, *op. cit.*, p. 566.

- 6) J.H. Clapham, *op. cit.*, pp. 182-183. 邦訳書 下巻 208頁。
- 7) Edwin G. Nourse, *op. cit.*, p. 34; cf. J. H. Clapham, *op. cit.*, pp. 209-214. 邦訳書 下巻 237-243頁参照。
- 8) Edwin G. Nourse, *op. cit.*, pp. 34-36, 289-290.
- 9) *Ibid.*, p.36.
- 10) *Ibid.*, pp.36-37. 表5は p.38. 尚, ここでイギリスがドイツと同様にラテン・アメリカ諸国やカナダ, オーストラリア及びインド等のその植民地に大きな市場を見出し, その見返りにそこから特に牛肉や豚肉を中心とした大量の農産物を購入し始めたこと, また角度を変えてみればアメリカが次第に工業国家として成長しつつあり, 1900年までには実際に世界第一の工業国に成長していたことが併せて指摘されなければならないであろう。尤も, 工業国たるイギリスとドイツの両国からのアメリカの輸入額が1898年と1914年との間に殆ど3倍加したことも事実ではあったが。Harold U. Faulkner, *op. cit.*, p.335.
- 11) Robert E. Gallman, "Commodity Output, 1839-1899", National Bureau of Economic Research, *Trends in the American Economy in the Nineteenth Century* (Princeton: Princeton U.P., 1960), pp. 26, 43.
- 12) Edwin G. Nourse, *op. cit.*, pp. 37-39, 294-303; Harold U. Faulkner, *op. cit.*, pp. 335-336; Gilbert C. Fite and Jim E. Reese, *An Economic History of the United States*, 2nd ed. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1965), pp. 429-430.
- 13) Gilbert C. Fite and Jim E. Reese, *op. cit.*, p. 429.

- 14) Harold U. Faulkner, *op. cit.*, pp. 23, 321.
- 15) *Yearbook of the Department of Agriculture*, 1921, p. 787, cited in Harold U. Faulkner, *op. cit.*, p. 322.
- 16) Gilbert C. Fite and Jim E. Reese, *op. cit.*, p.429.
- 17) Harold Barger and Hans H. Landsberg, *American Agriculture, 1899-1939: A Study of Output, Employment and Productivity* (New York: National Bureau of Economic Research, Inc., 1942), p. 21.
- 18) Gilbert C. Fite and Jim E. Reese, *op. cit.*, p. 430.
- 19) Edwin G. Nourse, *op. cit.*, pp. 40-41.
- 20) *Ibid.*, p.41.

#### 4

以上、南北戦争期から第一次大戦までの期間におけるアメリカの農業と欧州市場の関係について考察してきたが、先の本論で明らかにしようと努め、また種々の個所で示してきたこの問題に対する結論は略次の様に要約されるであろう。

欧州はその土地が生産に適していなかったこともあって、古くは植民地時代以来タバコ、米、そして（1793年における綿繰機の発明以降の）綿花の様な農産物の栽培をアメリカに期待してきたのであったが、最初の産業革命を経てイギリスが世界の工場として君臨するに至ると共に、そのイギリスを中心に西欧諸国は19世紀が進むにつれてそれ等の産物に加えて穀物、肉と肉製品等といった食糧ための市場をアメリカに開いてきたのである。然も、この市場は陸上及び海上での安価な輸送手段の開発乃至は発達等と相俟って、アメリカの西部への移住と同じ速さで拡大したのであった。そして、この様な食糧と工業原料としてのアメリカ農産物の輸出は、イギリスが変りのない大きな市場を提供していたのに加えて、殊に19世紀の最

98

### 第一次世界大戦前におけるアメリカの農業と欧州市場の関係

後の略 25 年間にはドイツを中心とした大陸諸国での工業化の進展に伴ってより一層促進され、西欧向けの輸出は一つのクライマックスに達したのである。

しかし、南北戦争後のアメリカの工業の著しい発展を中心とした経済社会の急速な成長は人口の増加を伴って漸次農業の地位を相対的に低下せしめたのであり、世紀の転換期を境としてそれが農産物価格の上昇を伴って国内市場を拡大させるに至ると共に、他方欧州諸国は自国内での農業を復活させ、またより有利な条件を提供する工業化の遅れた諸国や植民地へとその輸入先を変更し始めたのであった。斯くて、第一次大戦の勃発時までは、食糧を中心として農産物輸出は著しく減少したが、国内市場がそれを補うに十分な程急速に発達しつつあったのであり、アメリカ経済は農業と工業を中心としたその他の部門と貿易の間での望ましい均衡が維持された状態へと着実に接近しつつあったのである。そして、この均衡への接近過程は工業や商業等の他の部門を繁栄させるに十分な農産物の供給を可能にすると共に、農産物価格の上昇、地価の高騰、農産物の悪くない交換価値等を生み出し、農民は農業が経済の他の部門における進歩と歩調を揃えていないと相変らず主張していたのであるが、世紀の転換期から第一次大戦の勃発に至るまで彼等に並はずれた繁栄期を齎したのであった。

然るに、第一次大戦期の欧州市場の人為的な復活と 1920 年以降におけるその衰退がこの様に安定した状態に回復しつつあったアメリカ農業に再び由々しい痛手を与え、大きな問題を発生せしめたのであった。しかし、それについての考察は次の課題として別稿に譲らなければならない。

尚、イギリスについては連合王国、グレート・ブリテン等の表現がみられ、夫々異なった意味を持つのであるが、本稿では全てイギリスという表現で一括したことをお断りしておきたい。